

# 第 I 章 研究の概要

## 1 研究主題及び副主題

### 求められる資質・能力を育む学習指導の在り方

～子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

#### (1) 主題設定の理由

1年次では、現代の児童生徒を取り巻く状況を以下のように分析して主題を設定した。

人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつある。社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきており、そうした変化が、どのような職業や人生を選択するかに関わらず、全ての児童生徒の生き方に影響するものとなりつつある。社会の変化にいかに対応していくかという観点に立つと、今後の社会を生き抜くことが難しい時代になると考えられる。

また、新型コロナウイルス感染症が令和5年5月に5類感染症に位置付けられたことに伴い通常的生活を取り戻したが、学校においても長期にわたり甚大な影響を及ぼすものとなった。そうした中で、社会全体のデジタル化が急速に推進され、ICT 環境を最大限に活用して学びの保障を進めること、また学校教育の本質的な意義を踏まえ、この事態に対応するためのカリキュラム・マネジメントを展開することが全国の学校に求められた。

このような状況を踏まえ、学習指導要領の着実な実施、指導と評価の一体化を通して目指す児童生徒の資質・能力について、次のように捉えた。

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること

学習指導要領では、①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）、②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）、③「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）、④「児童生徒一人一人の発達をどのように支援するか」（児童生徒の発達を踏まえた指導）、⑤「何が身に付いたか」（学習評価の充実）、⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）の6点を基に、学校教育の改善・充実を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められている。これらを踏まえ、上川教育研修センターの第19次研究では、「求められる資質・能力を育む学習指導の在り方～指導と評価の一体化を目指す学習評価」と主題及び副主題を設定し、児童生徒が身に付けるべき資質・能力が明確化された目標を基にした学習指導と、形成的な評価に重点を置いた「指導と評価の一体化」を図ることで、児童生徒の学習改善と、教師の指導改善につなげることを目指した。2年次では、「個別最適な学び、協働的な学び」に焦点を当て、これらを一体的に充実させることで、児童生徒の資質・能力の確実な育成を目指した。

第20次研究では、現行の学習指導要領から次期学習指導要領への改定が近づく今だからこそ、現行の学習指導要領で重視されてきた「主体的・対話的で深い学び」の視点に再度立ち返り、教師の授業改善と児童生徒の学習改善を実現し、児童生徒の資質・能力の育成を目指すこととし、昨年度より2年間の研究を開始した。

そして今年度は、1年次の研究の反省を生かし、以下のように研究を進めることとした。

## (2) 研究主題のおさえ

### ① 研究主題～求められる資質・能力を育む学習指導の在り方

「求められる資質・能力」とは、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるために必要となる力である。「何ができるようになるか」を明確化し、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で再整理されている。

これらを育成する上で必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

「学習指導の在り方」においては、「どのように学ぶか」という点で、「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」の視点からの授業改善がその中核的な役割を担い、指導と評価の一体化を図ることが重要となる。

また、令和元年度からの GIGA スクール構想により、新たな学校の「スタンダード」として、小学校段階から学校における高速大容量のネットワーク環境の整備が推進された。これを受けて、ICT をツールとして効果的に活用し、教育の質の向上につなげ、教師・児童生徒の力を最大限に引き出すことが求められる。

以上、研究主題のおさえについては、2年間の研究の根幹であるため、大きな変更はせず、継続して研究を進める。

### ② 副主題～子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して

「子どもを主語にした」とは、教師目線の「何を教えるか」「どのように教えるか」という視点ではなく、児童生徒が「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という視点で、授業づくりを行うことである。児童生徒が自らの興味・関心に応じて、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を選択したり、自己決定したりすることができる場面を設定することが考えられる。また、教師が目標や学習過程、学習内容を一方的に設定するのではなく、教師と児童生徒とが共有しながら考えたり設定したりすることで、児童生徒が主体的に学習に取り組むことができる。以上のようなおさえで1年次の研究を進めてきた。

しかし、1年次の研究の中で、児童生徒が「自らの興味・関心に応じて」学習を進めようとするねらいが一人歩きしてしまうという課題が見られた。たしかに、児童生徒は自身の興味・関心に応じて、様々な視点の学びを意欲的に進めていたが、その学びの中に、身に付けさせたい資質・能力を明確にした教師の意図が反映されていなかったり、児童生徒にまかせきりの授業になり教師の効果的な働きかけが薄まったりする場面が見られた。そのため、2年次では、「子どもを主語にした」授業とは、「教師が意図的に仕組んだ学習環境の中で、児童生徒が自らの学びを調整し、最適な解決策を選択できる授業」と改めて設定し、研究の修正を図った。

「主体的・対話的で深い学びの実現」は、「求められる資質・能力」を育むための授業改善の視点である。教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童生徒の状況等に応じて、3つの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている。前述の「子どもを主語にして」という「学習者による学びの改善の視点」と同時に、「授業のねらいを設定し、授業を構築するのはあくまで授業者である」という「授業者による授業づくりと改善の視点」を往還することが、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考えられる。

以上の研究主題・副主題のおさえを、2年次の研究の核となるものとして研究員はもちろん、研究協力校授業者とも共有しながら研究を進めた。

## 2 求める児童生徒像

「知識及び技能」を習得し、「思考力、判断力、表現力等」を高め、「学びに向かう力、人間性等」を涵養し、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら深い学びに向かっていく児童生徒。

## 3 研究の仮説

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図ることで、児童生徒の学習や教師による指導の改善等につなげ、組織的かつ計画的に教育活動の質が向上し、児童生徒に求められる資質・能力が育成されるであろう。

## 4 研究内容

子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指すために、次の内容について研究する。

### 研究内容1 ～児童生徒の思考に沿った単元デザイン～

#### (1) 児童生徒が主体的に学ぶための課題設定と見通し

- ・児童生徒が実生活や社会と繋がりを感じたり、学ぶ意欲を高めたりできる課題の設定
- ・児童生徒が学習過程や目指すべき姿を見通せる指導の工夫

#### (2) 児童生徒が資質・能力を身に付けるための自己選択の機会と学び合い

- ・児童生徒が「何を」「どのように」学ぶかを自己選択できる機会の設定
- ・児童生徒が選択の多様性から生まれる必要感をもった協働的な学びの充実

#### (3) 児童生徒が学びの価値を感じる振り返り

- ・児童生徒が自らの学びを客観的に捉え、次の学習活動を修正・改善すると共に、学びそのものの価値を感じる振り返りの時間の充実

### 研究内容2 ～児童生徒の深い学びを促す教師の働きかけ～

#### (1) 教科の特質を生かした発問

- ・児童生徒が各教科特有の見方・考え方を働かせ、事象を比較したり、関係付けたりしながら深い学びに向かうことを促す発問の吟味

#### (2) 思考を束ねる可視化の手立て

- ・児童生徒が自分自身の考えを整理し、構造化するための可視化の手立ての工夫
- ・児童生徒が他者の考えを比較や関連付けしながら自らの学びを再構築する可視化の手立ての工夫

## 5 研究の進め方

- ・教科指導を主体として研究を進める。
- ・文献や実践資料に基づく理論研究を週1回の定例研究室会議及び夏季、冬季の集中研究室会議において進める。
- ・各年次とも、上川教育研修センターの研究員及び、研究協力校の授業実践を基にして理論を検証し、研究紀要にまとめる。
- ・研究の結果については、授業研究、研究協議等の授業実践で明らかにされた成果と課題を基に、研究紀要にまとめる。
- ・授業づくりにおいては、「単元デザイン案」（後述）を活用する。

## 6 研究計画の概要

令和6年度から令和7年度にわたる2か年において、単元デザインの工夫と、本時の展開の工夫を研究内容の柱として、研究を推進する。

### 2年次 令和7年度 授業実践（所員2名、研究協力校2校）

研究員の授業実践

旭川市立神楽岡小学校	社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」	研究員	林	裕生
北海道教育大学附属旭川中学校	数学科「標本調査」	研究員	林	尚輝

協力校の授業実践

旭川市立東栄小学校	算数科「円の面積」	授業者	前川裕太郎	研究担当	安藤	達摩
旭川市立神居東中学校	外国語科「Unit5 What design is good for everyone?」	授業者	白井 千貴	研究担当	高橋	宏幸

## 7 単元デザイン案

昨年度、上川教育研修センターでは、日々の授業を「子どもを主語にした学び」へと転換するための具体的手立てとして、独自の指導案様式「単元デザイン案」を開発・提案した。これは、単元全体を一貫した学びのプロセスとして捉える第20次研究の基本方針を具現化したものである。

具体的には、図に示す通り、A4判1枚の中に「単元の目標」「単元計画」「学習評価の計画」を集約した。特に「単元計画」においては、目標達成に向けた「教師の手立て」と、それに対応する「児童生徒の学習活動」を、「予想される児童生徒の思考」として構造化し、授業者が児童生徒の学びの軌跡を具体的にイメージしながら授業設計を行うことを可能とした。

上川の教育現場において、網羅的な学習指導案を日常的に作成することは多大な負担を伴う。本様式は、多忙な教員が「主体的・対話的で深い学び」の本質を外すことなく、日常の授業改善を機動的に行うための「学びの骨組み」として活用されることを企図している。

今年度の研究員および協力校による4つの実践においても、まず本様式を用いて単元の全体像を構築した。検討会では短時間での合意形成やイメージの共有に寄与し、研究授業の参観時においても、授業者の意図や単元の文脈を即座に把握する上で高い有効性が確認された。

＜単元デザイン案の効果＞

- ・ 日常的な授業改善の推進

主体的・対話的で深い学びを見通した単元設計と評価計画を、日常の業務の中で機動的に立案できる。

- ・ 協調的な授業づくりの深化

教師集団で授業を検討する際、単元の核心（ねらい）の共有が容易になり、協議が活性化される。

- ・ 授業参観の質的向上

単元の全体像を即座に把握することで、表面的な活動の追従ではなく、児童生徒の思考の変容に焦点を当てた参観が可能となる。

○単元デザイン案の例

単元の目標と評価規準を  
一目でわかりやすく表示。

①指導に生かす評価と  
①記録に残す評価の計画も網羅。

単元デザイン案 中3 数学科「標本調査」

単元の目標  
 ・標本調査や全数調査の必要性和意味を理解し、無作為に標本抽出することの重要性を認識することができる。  
 ・標本調査を活用して母集団の傾向をとらえ説明することができる。  
 ・標本調査について、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して粘り強く考え、数学を生活や学習に生かそうとする態度を身に付ける。  
 ・問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付ける。

	○教師の手立て ・「発問」	○生徒の学習活動 ・「予想される生徒の思考」	知	思	態
1	<p>【小単元1：標本調査の意味理解】</p> <p>○身の回りにはどんな“調査”や“検査”があるか考えさせ、それらを分類させることで全数調査と標本調査に着目させる。                      ・「身の回りにはどんなものがあるか？」</p>	<p>・「標本調査は本当に調査をしたとってよいのか？」                      ・「全員を対象にしている調査と、一部だけを対象にしている調査があるのはなぜだろう？」</p>	①	①	
<p>単元の問い 標本調査は本当に全体の様子を表しているといってよいのか？</p>					
2	<p>○無作為に抽出することの必要性について考えさせる。                      ・「アンケート調査において無作為抽出が重要なだろうか？」</p>	<p>・「無作為に抽出することが大切だ。」</p>		①	
3	<p>○母平均を推測する際、標本のばらつきを考慮する。</p>	<p>・「ばらつきが大きいから、数回分のデータを……」</p>		①	
4	<p>○箱ひげ図にまとめたデータを比較して、母平均を推測する。</p>	<p>・「箱ひげ図にまとめて比較してみよう。」「箱ひげ図の幅を大きくする。」「箱ひげ図の幅を小さくする。」</p>		②	
<p>単元の課題とそれを解決した姿を明確にイメージして単元を作成。</p>					
5	<p>【小単元2：標本調査を用いた探究】（3時間扱い）</p> <p>○パフォーマンス課題を提示し、生徒の関心を高める。                      ・「学年全体のデータはどんな傾向があるかを、どんな方法で確かめるとよいか？」</p>	<p>○自分たちで調べたい内容を決め、標本調査を用いて母集団の傾向を推測する。                      ・「標本調査で調べる。」</p>	②	① ②	② ③
6	<p>○標本調査の結果をもとに母集団の平均値、または傾向を推測する。</p>	<p>○調査の内容をスライドにまとめる。                      ・「標本の大きさによって正確さは変わってきそうだな。」                      ・「ばらつきが大きいから、数回分のデータを……」</p>			
7	<p>○他者の発表から気付いたことや学びをメモさせる。母集団のデータも同時にとり、全数調査の結果を明らかにした上で、標本調査の正確性について探究できるようにする。</p>	<p>○他者の発表から気付いたことや学びをメモさせる。</p>			
<p>単元の問いの解決                      ・一部のデータの調査でも、ほぼ正確に母集団の傾向を推測することができる。                      ・標本調査における標本の大きさは大きくするほど母集団のデータの傾向に近くなるが、費用、時間、手間などが増えるため適切な標本の大きさを考えることが重要である。</p>					

児童生徒の思考の流れを  
イメージしながら単元を作成。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①標本調査の必要性和意味を理解することができる。 ②コンピュータなどの情報手段を用いるなどして無作為に標本を取り出し、整理することができる。	①標本調査の方法や結果を批判的に考察し、表現することができる。 ②簡単な場合について標本調査を行い、母集団の傾向を推定し判断することができる。	①標本調査を用いることの意味や必要性を考えようとしている。 ②標本調査について学んだことを生活や学習に生かそうとしている。 ③標本調査を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしている。

## 8 研究の全体構造

## 研究主題

## 求められる資質・能力を育む学習指導の在り方

～子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

## 求める児童生徒像

「知識及び技能」を習得し、「思考力・判断力・表現力等」を高め、「学びに向かう力・人間性等」を涵養し、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら深い学びに向かっていく児童生徒。

## 研究の仮説

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図ることで、児童生徒の学習や教師による指導の改善等につなげ、組織的かつ計画的に教育活動の質が向上し、児童生徒に求められる資質・能力が育成されるであろう。

## 研究内容

## 子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現

## 研究内容1 ～児童生徒の思考に沿った単元デザイン～

- (1) 児童生徒が主体的に学ぶための課題設定と見通し
  - ・ 児童生徒が実生活や社会と繋がりを感じたり、学ぶ意欲を高めたりできる課題の設定
  - ・ 児童生徒が学習過程や目指すべき姿を見通せる指導の工夫
- (2) 児童生徒が資質・能力を身に付けるための自己選択の機会と学び合い
  - ・ 児童生徒が「何を」「どのように」学ぶかを自己選択できる機会の設定
  - ・ 児童生徒が選択の多様性から生まれる必要感をもった協働的な学びの充実
- (3) 児童生徒が学びの価値を感じる振り返り
  - ・ 児童生徒が自らの学びを客観的に捉え、次の学習活動を修正・改善すると共に、学びそのものの価値を感じる振り返りの時間の充実

## 研究内容2 ～児童生徒の深い学びを促す教師の働きかけ～

- (1) 教科の特質を生かした発問
  - ・ 児童生徒が各教科特有の見方・考え方を働かせ、事象を比較したり、関係付けたりしながら深い学びに向かうことを促す発問の吟味
- (2) 思考を束ねる可視化の手立て
  - ・ 児童生徒が自分自身の考えを整理し、構造化するための可視化の手立ての工夫
  - ・ 児童生徒が他者の考えと比較したり、関連付けしたりしながら自らの学びを再構築する可視化の手立ての工夫

## ICTの効果的な活用

- ・ 多様で大量の情報の収集、整理・分析、まとめ、表現
- ・ 児童生徒の思考の過程や結果の可視化
- ・ 情報の双方向性による瞬時の情報共有 等

## 単元デザイン案の活用

- ・ 「単元の目標」「単元計画」「学習評価の計画」を集約した指導案様式。
- ・ 予想される児童生徒の思考の構造化。
- ・ 授業づくりではねらいを共有しやすく、研究授業では参観者が理解しやすくする。